大学教育における自由

大塚伸夫
吉岡知哉
［司会］渡辺憲司

自由学園明日館（重要文化財）の講堂が、三年にも及ぶ修復を終えた開館記念として、大正大学の大塚伸夫学長と立教大学の吉岡知哉総長、自由学園の渡辺憲司最高学部長によるシンポジウムが開催され、さまざまな切り口から「大学教育における自由」とは何か、語っていただきました。

■はじめに

渡辺　今回の企画は講堂の改修記念ですが、私の意図は、他にもあります。大学の総長や学長は、いつも大学の広報をする立場にあります。つまり先生方から自分の専門の領域と大学の教育の接点について話を聞くことがあまりない。そこで、最先端にいるお二人に話をしていただこうということです。総長や学長は普段から噛み砕いて皆さんにお話をするというわかりやすさを心がけているわけです。ただ、私がお二人に言ったのは、そんなことはあまり考えないでほしい、と。自分の専門領域についてぶつけてもらって、わからないところは後で質問してもらおうとお伝えしています。そういうわけですので、お二人の先生方、今日はどうぞよろしくお願いいたします。

大学教育における自由
――仏教系大学としての大正大学の場合

大塚　伸夫

大塚と申します。渡辺先生からお誘いをいただいて「是非やらせていただきたい」と勇んで参りました。今日、初めてこの講堂の中にお邪魔させていただいたのですが、非常にすばらしい印象

を受けます。

大正大学といえば、仏教系大学ということですから、少し色を出させていただきたいと思っています。

最初に「自己紹介を含めた専攻領域」について、本学の特徴も含めてお話ししたいと思います。続いて「大学教育における自由」、そして最後に「大学が果たすべき地域との関係」という流れで進めさせていただきたいと思っております。

まず「自己紹介を含めた専攻領域」ですが、仏教と一言で言っても歴史が長く、二〇一七年は〝西暦〟の数え方ですが、キリスト教の暦で、仏教の祖はそれより約五百年ほど遡って、紀元前の五世紀くらいに、実在のゴータマ・シッダールタというネパールとインドの国境沿いの小さな国で皇太子として生まれた方です。彼は結婚もしていて、二十九歳の時に、妻と子を、今風に言うところで〝捨てて〟出家をしました。それから六年間、難行苦行をして、三十五歳の時に悟りを開きました。そのことを「菩提」とも言いますが、それから名実ともにブッダと呼ばれる者になりました。その当時は、ブッダと呼ばれる人はいなかったのですが、本当にブッダが現れたということが噂になって、当時は七つの国がインドにはありましたが、その七つの国の国王もお釈迦様の説法を聞きに来たというくらい仏教が浸透していきます。お釈迦様の説法は、だいたい小高い山の上で説法をして、その周りを聞きに来た人たちがぐるっと囲んでいる、そういう様子を想像していただきたいと思います。お釈迦様がメインで話をしていたのが、「解脱」についてです。この解脱とは、当時のお釈迦様のめざすところでした。これは「輪廻転生サイクルより解放される解脱」のことです。インドでは、お釈迦様の時代よりずっと昔、紀元前十世紀の頃に、アーリア人がカスピ海から南下していって、イランやイラクの辺りに定着してイラン人になったり、もう少し下りて、インドのアーリア人になっていくわけです。言語はサンスクリット語です。

なぜ解脱するかというと、インドには以前から「輪廻転生」ということが信じられていました。そのシステムは、お釈迦様の悟りの一つですが、私たちの煩悩が原因で、「惑（煩悩）」があって、それが「業」を引き起こす。そして「苦」を受けるのだという、この連鎖で我々は輪廻転生するんだと考えられています。これを簡単に説明すると、たとえばここにビールがあるとします。これを目で見て、手で触って、飲んでみて「うまい」と置きますよね。そうすると「もう一杯飲みたい」となるわけです。ここに「煩悩」が湧いてきます。飲めないと、手を出して盗もうとしたり、人を騙してでもそのビールを飲もうとする、そこに「業」が発生します。そして盗んだり騙したりすれば当然罰を受けますので、それが「苦」しみとなるわけです。それがどんどんと私たちの心（魂）を汚していく。そして「ご臨終です」と言われた時に、その魂がどれだけ汚れているかによって輪廻転生に引きずられていくということになっていきます。これが輪廻転生のシステムだと、お釈迦様は悟りを開かれたわけです。

では、この輪廻転生から解放されるために、自由になるためにどうすればいいのか。その手段として「戒定慧」があります。「戒」は戒律、「定」は瞑想のことで、「慧」は知恵のことです。規則正しい生活を送って、瞑想しながら知恵を磨いていく、その中で

自分の輪廻転生の中から解脱できるということです。これは、出家をしたお坊さん（比丘）と呼ばれる人たちが行なう修業です。一般の信者さんは、八正道を歩むというのが釈尊の教えです。悟りを開く、解脱する以外に、この輪廻転生のサイクルから自由になることはできないんです。六道というものがあります。一番下が地獄、二つめが餓鬼、これは飢えと渇きの世界です。そして三つめが畜生、これは仏教用語で動物のことです。四つめが戦争ばかりしている阿修羅の世界。五つめが人間世界、そして最後が天の世界です。仏教は天の世界も、輪廻転生する枠の中にあるのです。梵天や帝釈天といったインドの神々でも、悪いことをすると輪廻転生して地獄に落ちるという発想があります。そういう背景がお釈迦様の頃の考え方にはありました。

大乗仏教、紀元前一世紀頃に話を移すと、大乗仏教はキリスト教の「愛」によく似ています。そこに登場するのは菩薩という考え方です。菩薩とは「私は敢えて永遠の輪廻転生を繰り返す」ということです。それは人々を救済するという慈悲、慈愛の心を優先させるということです。そして自分を磨きながら他者を救うという、菩薩思想が登場してきます。菩薩とは、自己犠牲以外の何ものでもないので、自分のことはどうでもいい。とにかく他人を救うことを目的として、果敢に輪廻転生に挑んでいく。そして解脱をしてしまうと人々を救えなくなるから、絶対に解脱はしないと誓うわけです。これが菩薩の考え方です。

私の専門は、紀元五世紀以降にインドで起こった密教です。密教とは、人を助ける手段の一つとして、インド古来からある呪術、加持祈祷を導入します。真言宗のお寺である川崎大師や成田山は、加持祈祷をしに行くお寺として、初詣で明治神宮に次いで人気があります。加持祈祷とは、お札を貰いに行ったり護摩符を貰いに行ったりする、インドの古代の呪術です。護摩というのはインドのバラモンという種族が行なった呪術です。そのようなものを民衆救済の手段として取り入れたんです。それからもう一つは、我々はこの身のままでもう救われているのだと考え始めました。それは日本の言葉で言うところの「即身成仏」ということです。キリスト教にも「神の子である」という言葉がありますが、その場合は洗礼を受けないとダメなのでしょうか。仏教の場合は、洗礼を受けなくても生まれながらにして仏であると言っています。そういうことで、現前利益、物理的なご利益と、心の安心と書いて仏教では「あんじ」と呼びますが、そのようなものを主張して、密教が興りました。

この中で、特に本学の建学の理念として、「知恵と慈悲の実践」というものがあります。これが大乗仏教の菩薩の考え方そのものなんです。知恵を磨くとは、自分磨き、そして慈悲とは、他者を救済するという共存、共栄の精神を持って、自分だけが助かればいいと考えていた仏教のお釈迦様の時代より、一歩展開したものになっています。本学ではこれを建学の理念に摂取しました。大正大学を卒業していく学生たちには、菩薩のような人間になってもらいたいというのが本学の創設者たちの考え方です。

そこで「大学教育における自由」に移りたいと思います。ここで大事になのは、先ほどの菩薩の考え方とも大きく関わってきますが、仏教の教えの中に「空」という教えがあります。『般若心経』というお経の中にこの教えがコンパクトにまとめられており

ます。「空」の教えがなぜ増えたかというと、先程も申し上げましたが、ビールがここにあると、どうしても飲みたくなるわけです。目・耳・鼻・舌・体の感覚器官を通じて、これがビールだと認識しています。この認識が「飲んでみたい」という欲望につながるわけです。それだったら、最初からビールがないと思う、これが「空」です。あくまでも自分が脳みそで「ある」という概念を否定する。それによって煩悩が湧かないようにする。これを徹底的に突き詰めていくと、こちらにきれいで若い女性がいる、こちらに年寄りの女性がいる、この二人が倒れてしまった時にどちらを先に助けるか。間違いなく若い男はきれいな若い女性のほうに手を差し伸べようとするはずですが、緊急時に困っているのはおばあさんのはず。そういう選り好みをするような菩薩であってはいけないわけです。救急車に乗せた後も、ともに病院まで行き傍を離れない、それが菩薩の精神です。

こういう人間になってほしいということで、大正大学では「４つの人となる」という教育ビジョンを提示しています。それが〈智慧・自利の実践〉としては、「自灯明」という、真実を探求し、自らを頼りとして生きられる人となる。「中道」という、執われない心を育て、正しい生き方ができる人となる。〈慈悲・利他の実践〉としては「慈悲」という、生きとし生けるものに親愛のこころを持てる人となる。「共生」という、共に生き、共に目標達成の努力ができる人となる。特にこの「共生」のこころがなければ、人は一人では生きられませんから、ご縁があってこそ人はこの世に生きていられるわけです。これを打ち立てています。

また「仏教・大学・学生の三者一体による自由」とあります。すばらしい人材育成をするのに、大学も仏教も一つである。理念の違いはあっても、それはキリスト教も同じだと思います。そこに学生がどのように関わってくるかということになってくるわけですが、本学の場合は教員も職員も学生も、自灯明、中道がありますので、今風に言うとセルフマネジメントなんです。自らを律する精神を持ち、自己を確立してほしいと考えています。四年の勉強が終われば社会の中で生きていくわけですから、そこでの人間関係に捉われすぎず、自由自在に生きてほしい。そういう人間力を育てていきたいと思っています。

大学が果たすべき地域との関係として、大正大学は去年新たに「地域構想研究所」をつくり、同時に「地域創生学部」をつくりました。二〇一一年三月十一日の東日本大震災の後に津波がやってきた時、大正大学は一か月もしないうちに、現地で我々を受け入れてくれる団体と交渉をし、約一か月半が経つころにはボランティアで復興支援に行きました。そういうことをきっかけとして、大正大学は地域というものに舵を切りました。

今、大学はグローバルを謳っていますが、本学は国際化できるほどの余裕がありませんので、どちらかというとローカルの方に集中しようということで、今は地域社会貢献の方に舵を切っています。その中で、北海道から奄美諸島まで、五十九の広域自治体との連携を構築しています。再来週には岐阜県の中津川へ行って調印を結ぶことになっていますので、それを入れると六十になります。今、地方の国公立大学には、地域創生がらみの学部が多くできていますが、東京からやるというのはいいことだと思っています。また、本学は巣鴨にありますので、巣鴨の商店街とも連携

していこうという「すがもプロジェクト」を推進しています。そして豊島区とも「としま共創事業」を推進しています。

このようなことで、今、大学も企業も社会貢献を求められています。大企業であればあるほど、社会貢献を求められています。大学も同様で、地域とともにあるんだというような発想の下で、本学は社会貢献型の取り組みをして、学生もその地域の一員であるという自覚を育てると同時に、社会人としての基礎力も養成していきたいと願っています。

自由の諸概念と大学

吉岡　知哉

今日は八月十一日。考えてみればアメリカで起こった同時多発テロから、来月で十六年も経ってしまう。東日本大震災からは六年と五か月になります。こういう時に自由について考えるのは大事なことだと思っております。

立教大学は「自由の学府」と自称しています。元々はアメリカ聖公会という、これは元を遡るとイギリスの国教会という、イギリスがアメリカに植民地を作っていく時に定着して、独立戦争の時に東海岸を中心として広がった宗教です。アメリカでもかなり上の階層の人たちが多い宗教で、たとえばＧＨＱの人たちの多くが聖公会の信徒でした。

立教大学は校歌の中にも「見よ、見よ、立教　自由の学府」というリフレインを掲げていて、この歌は、一九二一年（大正十）に、六大学野球に優勝した時に歌うためにつくったものです。今年は、五十九年ぶりに全国優勝しました。ちょうど大正デモクラシーの時代で「自由」ということがある種のリアリティを持っていた時につくられた歌です。

「自由」は非常に大きな問題です。単に理念や哲学的な観念の問題であるだけではなく、これを巡ってたくさんの血が流されてきた言葉でもあります。日本ではほとんど言われませんが、今年はロシア革命から百年の年です。さらに遡ると、宗教改革から五百年です。私の専門はヨーロッパの政治思想史です。授業では古代ギリシャ・ローマから、通史という形で十九世紀までの近代の思想の話をするようにしています。研究論文を一番多く書いたところは十八世紀のフランス。ルソーのように、自由を中心的な課題とした時期です。ただ「自由」とは何かと言われても、あまりよく分からないことがたくさんあります。これを説明していくと一年間の講義になってしまいますので、これを要点のみ、また大学というものを考えた時にそこに入ってくるいくつかの「自由」の考え方を踏まえてご説明していきたいと思います。

それともう一つ、今の大塚先生のお話を聞いていて思ったのですが、紀元前五世紀というのは、ヨーロッパではギリシャ・ローマ、いわゆるギリシャのアテナイが力を持っていた時期で、その後にアレクサンドロスの時代がきて、アレクサンドロスはインドにまで行くわけです。ですから、紀元前四世紀以降にはアジア、ヨーロッパから見て東方の世界の文明がいろいろな形で流れ込んできます。キリスト教、あるいはキリスト教以前のいくつかの地域には終末論的な考え方や善悪の対立の考え方などが混ざり合っ

て、キリスト教の中にも東方的なものが重なっていて、じつはヨーロッパとアジアは非常に影響し合っているということを考えました。

では、話を進めてまいります。まずは自由の古典的な考え方です。世界史の授業で、ギリシャが都市国家と呼ばれていたことを思い出していただきたいのですが、自由人と呼ばれる市民と、奴隷がいて、この奴隷は自由人の家の中にいる家内奴隷です。家の単位は「オイコス」と言いますが、それがいくつも集まって「ポリス」という都市国家ができていると考えられています。したがって、市民は奴隷の主人であると同時に、都市の構成員です。ですから都市同士の戦争の時には武装して行く戦士であり、その権利と義務を有していました。それぞれが自前で武装をしていましたが、それが都市の構成員であるということで、自立や自律というのが自由の一つの核となっています。「戦士の徳」という責任感が自由というもので、したがってこれは義務というものと密接に結びついています。誰かの命令によってではなく、自発的に自分の共同体のために戦う。これは後の「社会から自由である」という考えとは、時に反対の方向性を持つことになります。

次は「真理はあなたたちを自由にする」という言葉を掲げました。これは聖書のヨハネの福音書の中の非常に有名な言葉です。ここでの「真理」というのは、一神教的な神と結びつくことによって自由になるということです。これはある種の排他性を持っているかもしれません。真理というのはこの場合一つのものであって、唯一の神と唯一の真理。真理と信仰が結合することが自由の保障であるという考え方になっています。つまり、神と真理と信仰と自由というのが一体になっている。この考え方は非常に強い一神教的な考え方だと思いますが、自由を考える上で大変重要な物の考え方です。

ついでになりますが、今はキリスト教のことに触れたので、資料には「教会と修道院」とありますが、これはプロテスタントが出てくる前のカトリックの、いわゆるキリスト教ヨーロッパの世界、ヨーロッパ全体が神の体としてある、そしてローマ教会がその中心にあるというヨーロッパの一つの理念です。その時は、教会が精神生活を統括していたわけです。その頂点にいたのがローマ教皇です。すべての教会はローマ教皇を中心としたヒエラルキー（位階制度）になっていて、教会と、そこに入っていない人たちは分かれていました。これは仏教の在家の在り方と関係してきますが、要するに聖職者と一般の信徒が分かれていました。カトリックの場合は、生まれたら人間は基本的に洗礼を受けますので、基本的には皆がキリスト教徒ということになっていますが、聖職者とそうでない人というのが分かれていました。教会は、ローマ教皇の下にある真理を独占している、つまりローマ教皇というのは神の代理人であって、すべての協議の最終的な決裁権を持っているという仕組みになっています。これを「正統」とすると、それ以外は「異端」ということになります。ところが、異端というのはいくらでも湧き出てくるわけです。当時は聖書が読まれていたわけではありませんが、神の名前において抑圧と闘う人たちも出てきます。それに対して「異端」というものを研究しなければ「正統」が保持できないということになります。それができるのが修道院です。教会はローマ教皇を頂点としてはっきりとした

位階性があって、一般の信徒のために活動するものなのですけれど、修道院は学術組織です。もちろん中にはヒエラルキーがありますが、そこでは「異端」の文章であるとか、非常に大切なギリシャやローマの、アリストテレスやプラトンといった聖書より前の書物を研究して、そこで得た知識が教会の知識を豊かにしていくという側面を持っています。また人的にも、たとえば村の優秀な人が修道士になって、そこで勉強をして教会組織の中に戻っていく。ヨーロッパの社会は非常に堅い身分制ですが、修道院では下からそこを抜けて上に上がっていけるような安全弁としてのはたらきもあります。教会と修道院というのはそう見るとおもしろい関係で、修道院がなければ教会という組織はどんどん堅くなって、だから早く壊れたんじゃないかと思うんですが、このように「異端」の研究をしながら、ある意味では「異端」の巣窟でもあるわけです。そういうものを持っていたというのがある意味ではヨーロッパの強さだったとも思います。映画にもなりましたが『薔薇の名前』というウンベルト・エーコの小説がありますが、十四世紀の修道院の中の異端が匂う状態の、南フランスを舞台にした作品です。ヨーロッパの学問の一つの原点は修道院の中にあったといえるかもしれません。

次は「都市の空気は自由にする」という、中世の都市の成立についての話です。紀元十一世紀〜十三世紀頃、ヨーロッパがそれ以前の農業の革命などがあって力を付けてきた頃に、ヨーロッパが自信を持ってくる。特にイスラムに比べればヨーロッパの文明は明らかに下でした。ヨーロッパで勉強した修道院の学生も、イスラムまで勉強に行ったりもしていました。アリストテレスの知識なども、イスラムから入ってきたものです。これは未だにそうかもしれませんが、イスラムに対するある種のコンプレックスというものがヨーロッパの文明の中には色濃くあると思います。この頃に力をつけて、十字軍などをやるわけです。またはレコンキスタという、スペインのイベリア半島の国土回復といわれる活動も徐々に始まり、ある種の激動の時代に入っていきます。その頃に、中世都市ができてきます。それまでの農業中心となった世界から、都市が成立して、商業圏、市場が確立してくるのがこの時期です。中世にはそれぞれのところに諸侯と呼ばれるような君主がいて、その君主がその土地と人を支配している、それが乱立しているという状態がだんだんと整備されて、その時に諸侯たちのところから自由の権利を買い取っていくんです。商業によってお金を貯めて、自分のところの君主から自治権を買い取る。そして自分のところの周りに城壁を作る権利を持って、他の土地とのあいだにネットワークを作っていくという時代になります。その都市を担っていたのが同業者組合で、その集まりで都市が構成されていく。その親方たちが集まって都市の参事会を作ったりして、ある種の自律性を持っていく。

それとほぼ同じ時期に大学というものができてきます。大学は都市と結びついているものです。「都市の空気は自由にする」というのは、一般の農奴は自分の土地に縛られていて移動する自由がありませんが、都市に逃げ込んで、よく言われるのは一年と一日の期間を都市にいると、両親の追求権がなくなり、自由になることができると言われています。その中で大学というものができてきます。「universitas」とは、元々はラテン語で「組合」とい

う意味です。でき方はさまざまですが、勉強をしたいという学生たちが集まって、学生団体をつくる。そこが中心となって教授を雇う場合もあります。あるいは、教授たちが集まって教授団をつくり、学生団体と交渉をして給与や授業日数を決めたりといった形で、都市の中にできる同業者組合の中でも、勉強する人たち、勉強を教える人たちの集団というものができてきます。これが大学の自治と呼ばれるものの原型です。次第に、ここで教えることがまとまっていきます。

「artes liberales」とは、リベラル・アーツのことで、文法学、論理学、修辞学、代数学、幾何学、音楽、天文学の七つの科目です。これらは皆、神の被造物を学ぶというのが基本的な考え方です。そこで勉強をして、神学と医学と法学という専門科目に進んでいくというのが、大体の形です。基礎的な勉強の方法と、それから専門科目を身に付けていく。大学は、次第に、それぞれの地域の有力者ではなく、もっと上にいる人たち、たとえばフランス王などが、力をつけるために都市と結びつくということになります。都市は、自分たちの君主から自由になりますが、すべてではありませんが、皇帝や王と結びついたりもする。その中で、大学も皇帝や王が作るということが起こります。たとえば法学を学んだ人たちというのは、王の官僚になっていきます。その王がやがて絶対君主にまでなるのですが、たとえばフランスの王の、フランスの領土全体に治権が及んでいるという考え方を組み立てたのは、大学で勉強した法学者たちでした。大学の自由というのは両義的な要素を持っていて、新しい社会に対応していくということが、次の権力を生み出していく時に大学がいろんな形で関わっているということです。

続いて「良心の自由」について。これはルターの話になります。ルターは一四八三～一五四六年を生きて、一五一七年に『九十五箇条の提題』を掲げて宗教改革を行いました。カトリックの考え方というのは、善行をすることで天に行くことができる。この時期になると、これが贖宥状として、お金を寄付することによって表されて、天国へ行く道を開くことになります。善行を重ねることによって、人は天国へ行ける。ルターはこれをおかしいと考えるわけです。つまり、人間の判断で善を積み重ねていって、神に対して「自分はこれだけの善行をしたんだから天国へ行けるはずだ」と、交渉をするのはおかしい、つまり交換を持ちこんでいるのはおかしいと言うわけです。そうではなくて、神は一方的に罰を与え、一方的に救う存在である、絶対的というのはそういうものだとルターは考えています。神は恐ろしい者として描かれることがありますが、そこから反転させて神というのは愛の存在であって、一方的に救いをする存在。人は救われるということに対して、ただ信仰を持つことでそれに答えるのみだというのがルターの考え方です。つまり神と人間が直結するということで、教会制度というものが一切意味を持たなくなって神が自分を救ってくれる、ただそれだけの関係が本質的だとルターは考えます。それが「万人司祭主義」や「聖書主義」「良心の宗教」という考えとつながります。これらの考え方は、神と結びつくことによって、世俗のあらゆることから自由になるという考え方です。ただルターは同時に、これを「奴隷意志論」と呼びます。つまりそこに自由意志はなく、自分の魂は神に完全に捉われていると考えます。

この考えはエラスムスといった当時のユマニストと呼ばれる思想家たちと強く対立することになります。ルターは、自由という考え方と、その真裏の奴隷意志というものを併せ持った、ユニークな考え方を持つことになります。

このことで、ヨーロッパキリスト教教会の束縛が解けていきます。すると新しい新興勢力が集まってきますが、それがプロテスタントの信仰を持ちながら、世俗のカトリックの権力と結びついた従来の人たちと対立して宗教戦争になっていきます。それから農民たちも解放への道の希望を持ち、これが農民戦争が起こる。ルターは農民戦争に対して、最初は同情的でしたが、直ちにこれを非常に強く否定して弾圧しようとします。自分たちの正しい信仰を守るというのが、世俗の君主たちであるとルターは考えます。世俗の君主たちは、教会と正しい信仰を守るのが仕事であるとルターは考えます。この結果どうなったかというと、宗教改革の結果、アウグスブルクの宗教和議が一五五五年に結ばれますが、それぞれの地域の権力が選んだ宗教が、その地域の宗教ということになります。つまり、カトリックの君主がいるところはカトリックの地域で、プロテスタントの君主であればプロテスタントの地域となっていきます。「領邦教会」と資料にありますが、最初にルターが考えたこととまったく違う結果が起こってくることになっていきます。

最後に「新自由主義とグローバリズム」の話をします。今お話したのは、あくまで主として大学の自由を考えた時に、それを支えている自由の話でした。一方で、個人主義と結びついた自由の考え方もあって、これもルターの考え方の流れの中にあります。それが市場の考え方で、市場原理と結びついていきます。これは十八世紀、十九世紀には経済的な自由主義になっていきますが、これをかなり極端にしていったものが、大雑把に言えば新自由主義と呼ばれるものです。市場の原理というものが最終的な判断基準になっていく。したがって、競争をして勝った者が結果的に正しかったということが分かるという考え方です。これはプロテスタントの中にもある考え方です。そしてご存知のように、この考え方が二十世紀の最後の十年くらいから非常に力を持っていく。日本の大学について言うと、一九九一年に『大学設置基準』の「大綱化」があって、かつての一般教育部や教養学部と専門学部が分かれていた枠組みを外しました。それぞれの大学がそれぞれの個性を作るというイメージです。市場原理に基づいた大学の在り方が今の大学の置かれている状況です。一方で、大学とは社会的な存在です。大学の内部は安全な場所で、そこには自由が満喫できる、そのような形で言えるような少数のエリートを作る世界では、もう今はないだろうと思われます。しかし、大学の内部と外部はどう線引きされるべきなのか。あるいは権力との関係、経済的な問題、そして思想の問題、あるいはマスコミや世論やＳＮＳ、そういったさまざまなものを抱えながら、それでも大学は社会と結びついていく、それをどう捉えていくかというのが今、大学が抱えている根本的な問題だと思います。世の中はどんどんグローバリズム化していき、財政は苦しい。少子化は進んでいます。さらに人口は都市に集中しているので、その問題をどう捉えるか。ただ、同時代のさまざまな要素から一歩離れて、なおかつ大学が持っている、今は見えていない可能性を開いていくことが大きな課題

だと思っています。

■質疑応答

渡辺　大塚先生と吉岡先生の間で確認事項のようなものがあれば、お互いでお話いただきたいと思いますがいかがでしょうか。

大塚　控室でも少しお話しましたが、仏教はインドでできあがったもので、アーリア民族の発想なんです。アーリア民族の言語はサンスクリット語でした。これは古代ギリシャ語、あるいはギリシャからスペインまでのヨーロッパ語の大元となっている言語です。旧約聖書の原型のラテン語も、原型はサンスクリット語にあります。「自由」という言葉の発想ですが、先ほども言いましたが「自由」という言葉はサンスクリット語には見当たらないんです。「解脱」というのは、今でいう「解放」という意味なんです。「set free」といったような、何かの束縛から解放してあげることというような語源が「ヴィムクティ」なんです。そうすると、仏教の自由の前提には束縛がある。ルソーの考えにも、社会権力からの解放といったことがあったと思いますので、発想としては「自由」という意味合いでは似通っていると思っています。そこでお聞きしたいのですが、大学の設立当初も、何かからの自由というものが謳われたと思うのですが、それは何からの自由と言えるのでしょうか。

吉岡　一つは土地というものと結びついていたということで、そこの封建的な領主たちが持っている支配権、そこから都市が自由になっていく。封建的な領主から逃れる一つの方法が都市へ行くということ、それからもう一つが修道院でした。大学ができた時は、そういった中で都市の雰囲気が盛り上がっていったと思うんですが、大学で学ぶことによって、新しい職業の道が開けてきた。大雑把に言えば、当時の中世的な権力からの自由というものが非常に大きな要素だったと思います。自由の一番の根幹には、何者にも束縛されないということがあると思いますね。ギリシャ・ローマの「自由」も、それぞれが自律している。自分の考えは人の考えではないという姿勢は常にあったと思うんです。

　ただ、自分一人がいろんなものから自由になるということだけでは事が済まないということもあって、それはもしかしたら都市という問題とも結びついているかもしれません。皆が一緒にいるわけで、自分一人が自由ということは成り立たない。では、自分が他の人と一緒に自由であるためにはどうしたらよいのか、という問題設定は常にあったと思います。都市より前だと、キリスト教の隣人愛にしても共同体が全体になっていて、あまり個人というものが考えられていなかったということもあります。ただ、そこで個人というものが意識されるようになった時に、個人だけが自由になるということは考えられないので、他の人の自由とどう調整するのかという問題は最初から組み込まれていたと思います。

　ルソーの社会契約では、自分は完全に自由なので、自分が決めたことには自分が従う。皆がそれぞれで同じことを決めれば、それが法律になるという考えです。自由が持っている自律性という部分を強調して、それを複数の人間で共有するという仕組

みを持っていたのだと思います。

大塚　もう一つ伺いたいのですが、若い世代では「自由」というと「自由奔放」というものだと考えている節があるのですが、私たちの世代だと、ある一定のルールがあって、その中での自由でないと社会が成り立たないという考えがあったと思うんです。ルソーの話に自分が決めたことは守るというお話がありましたが、やはり共存社会で生きている以上は、ある一定のルールに従った自由というものがあるべきだと思うんです。これについてはいかがでしょうか。

吉岡　そうですね。ルールがなければ自由もないわけです。そもそも自由というのは、ルールを作る自由だと思うんです。従うことの前に、それとのペアで、自分でルールを作るということ。自分が作ったルールなので、自分が従う、それは自分の意志から離れていくわけではない。

大塚　そうですよね。私が何を言いたいかというと、中学高校では校則がありますよね。これに従いたくないということで、我々の世代でも教員と生徒がやり合ったんですが、やはり大学も自由は自由ですが、緩やかな中にもルールがあるんです。その中に収まってくれないと、なかなか大変なんです。毎日のように学生も教員も問題を起こしますし、職員もそうです。「自由」を履き違えているのではないかと、私は思ってしまうのですが。

渡辺　私自身が相当履き違えているような気がするので言いにくいのですが、吉岡さんから大塚さんにご質問はありますでしょうか。先ほどのルールを作る自由、個人の自律という問題は非常に重要なところだと思うのですが。

吉岡　僕はクリスチャンではないので、そんなにキリスト教に詳しい方でもないのですが、一つはキリスト教の考え方は神と自分との関係があって、その関係の中で神が命令していて、そこに隣人愛が生じてくる。ルターの場合だと、ほとんどが神と自分との問題で、それとの反射的な感じで隣人愛が出てきます。それが労働という形で表現されるということになるのですが、仏教の場合では、それぞれがそれぞれの中に存在として、確固たる価値が認められている。キリスト教もそうなのですが、それはやはり神との関係において、ということになる。仏教はそれはないですよね。その時に、共同体や他者という問題を、隣人愛とは違う関係で組み立てていることがあると思うのですが、そこは仏教ではどうなっているのかということに非常に興味があります。

大塚　仏教の中に、二律背反的なものがあるんです。釈尊の時代の仏教は創造的な神は認めていないんです。ですので、この世界の成り立ちについては言わない。今こうやって我々がいるのは、輪廻転生の永遠の過去から永遠の未来に向かっていると考えていました。ですから、神と自分という、いわゆる上下関係というものはないんです。ただし、大乗仏教の時代になると、菩薩という考え方が出てきて、菩薩が永遠の活動をすることによってブッダと呼ばれるものになる。阿弥陀如来や薬師如来と呼ばれる仏様がいますが、そういう仏様はかつては菩薩だったんです。それから仏様になりました。その仏様たちにとっては、神と自分というような関係が成立してきます。つまりそこに信仰を求めるようになってくるんです。ですから、同じ仏教でも創

造的な神は認めないのですが、楽園としての神、といったような「浄土」の思想が出てくると、キリスト教の「天国」のような発想が出てきます。そうすると、そこへ往生をする。これはキリスト教の昇天と同じです。そこには仏様と私、というような関係性ができあがってきます。これが一番はっきりしているのは、浄土宗や浄土真宗ですね。

では、これが自由ということとどう関わってくるかというと、先程も言いましたように、浄土宗でも隣人愛的なものがあります。また、先ほど「労働」という言葉が出てきましたが、仏教の中にもお手伝いするということがちゃんとあります。そういう共通性は多くあって、日本仏教になると多くの宗派はありますが、ほとんどが同じです。少し違うのが日蓮宗系だけだと思いますが。答えになっているのかどうか分かりませんが、非常に似てきているということは言えますね。

吉岡　もう一点、ユダヤキリスト教の強みでもあり弱みでもあることなのですが、神がこの世界を作ったんです。つまり神は創造主である。同時にキリスト教だと、最後に終末がくる。神はそこを超越していますが、この世界には始まりがあって終わりがある。仏教はそうではないですよね。

渡辺　キリスト教にはさまざまな宗派があり、仏教も同様である。そこでもう一度、先生方に問いたいのは、現在それぞれがキリスト教系の大学、仏教系の大学のリーダーである立場のお二方が、現実社会においてどう自由に対応していくのか、公私両方面のお立場からご意見をいただきたいと思います。

私は江戸文学が専門ですが、浮世草子という一七〇〇年代の小説群には、座敷に侍っている女性、遊女や芸者たちが「休憩をください」というような時に「自由にさせていただきます」という言い方をするんです。これはつまり、「お手洗いに行ってきます」という意味なのですが、私はこの文に触れた時にびっくりしました。それから、いわゆる「自由」と対になる江戸の言葉は「円満」なんです。皆が丸く緩やかな気持ちになる、それが自由の形だということです。それが明治になると、「自由」の形は大きく変容することになります。つまり〝あれ見やしゃんせ　アメリカの　自由を我らもほしいかな〟という小唄に唄われるように、「自由」は「自立」「独立」「人権」という意味が付加されるようになります。大きく言うと日本の歴史の中にはあります。

私は今日、仏教とキリスト教というものの違いを聞きながら、ちょっと切り込んだ言い方をすれば、大正大学は慈悲の学校である、菩薩の学校である、と。釈迦の教えからもう一つ変わった形で生きていくのが菩薩の考え方だとすれば、現代社会の中において、本当の慈悲というものを、どのような課題と捉えて大学は接しているのかということをお聞きしたい。

大塚　難しいですね（笑）。実は大正大学の前身は、四つの宗派の専門学校が合体してできたものです。今、大正大学のすぐ脇に淑徳巣鴨という、今は男女共学ですが、かつては女子高校がありました。その奥に、戦後の食べられない方々の住まいがあったんです。百軒長屋、あるいは二百軒長屋か、そう呼ばれた場所があったんです。そういった人たちに、特に浄土宗の若い僧侶たちが援助をしていました。その中には子どももいましたか

ら、その子どもたちに勉強を教えたり、遊んであげたりもしていました。それが大正大学の前身でした。その後、大正大学は社会事業という学科を作って、その後、社会福祉学科を作っていったんです。今は臨床心理という学科もありますが、他者と関わるところに力を入れたいと思っています。それが大正大学が元々持っていた理念と、これからの社会が合致するところかと思っています。

渡辺　今、現代社会における大正大学の役割をお話しいただきました。では、大学は果たして自由を守っているのか、多くの場面で人権が侵されているような状況の中で、大学はその先端的な思考を持っているかどうか、それをキリスト教系の大学のリーダーである吉岡さんにお聞きしたいと思います。

吉岡　キリスト教だから、ということではかえって答えにくいかもしれませんが、少なくとも大学というのは、先程言ったように社会的な存在としてあるわけですが、その都度の社会の目の前の問題に応えるだけではないし、その時のニーズに常に応えなくてもよい。もちろん応える必要もあるのですが、それだけではないというところがあって、それが思考の自由というものの根本にあるんだと思います。考えるということは時間がかかるし、手続きもたくさんある。ただその力を身に付けるということが、大学が自由であるということの根本であるし、そこから社会に出て行った人たちが自由であり得るということだと思います。社会そのものは自由ではなくて、それは今の社会もその通りです。つまり、今の社会には多くの不自由がありますが、それに対して大学の自由とはこの社会における不自由の内容や原理を考えて、それに対しての生き方を身に付けていく場所であるということが重要だと思っています。そういう意味で大学は自由でなければならないし、そうでなければ大学である必要はないわけです。社会がそのようなものとして大学を必要としているということが重要で、大学側もこの存在意義については常に発信していかなくてはいけません。社会の側が「大学なんてなくてもいいじゃないか」と思った瞬間に、大学はただの知識の集積所になってしまうと思います。

渡辺　大学が理想を失っているのではないか、大学自体が、何かこう、ふらふらしているのではないかと。自由学園は文科省からお金を貰っていないという誇りがありますが、こんなところでお二人を責めてもしょうがないのですが（笑）。今、吉岡さんがおっしゃったことと、たとえば仏教の思想の中で、その人それ自身がもう既に人格なのだという感覚があるように、大正大学はそこに存在すること自体に重みがあるというような、その感覚が薄れているんじゃないかという気がするんです。

　というところで、会場の皆さんにもご意見もお伺いしましょうか。

質問者①　私は六十二歳です。吉岡先生も大塚先生も、大学の長ということで、毎日が大変な思いをされていると思います。その中でも、両先生は今日までかなり学問を続けてこられたはずです。ふと、我に返った時に、「自分はこれだけ勉強してきたので、自分の身が自由なのだ」と思うことはありますでしょうか。私は勉強が足りていませんので、束縛や拘束から解放されてはいませんが、もし先生方が、少しでも自由を感じることがある

のか、それを教えていただきたいと思います。

吉岡　立教の総長はまったく自由ではありません。内外の仕事に追われて、まるで自由はありません。では、かつて研究をしたり授業をしたりしていた時期は自由だったかというと、今に思えば自由だったと思うのですが、その時には必ずしも自由な気はしていないんです。つまり、やらなければいけないことが確実にあって、何日までにこれだけの文献を読むだとか、この問いを解かなければいけないとか、結構苦しいものなので、その時に自由だと感じたことはあまりないです。ただ、さらに振り返ると、学問ができる、ものを考えることができるというのは自由がないとできないことです。ものを考えること自体が、自由であることと本当に不可分で、何かを考える時は自由でないと考えられない。「このことを考えろ」と言われて考えられるものではない、ということを含めて、やはり自由であることと、研究する、勉強することが不可分であることは確かだと思います。

大塚　私も、今はほとんど自由がありません。家に帰れば寺の住職ですので、月曜日から金曜日は学長をやっていて、土曜日、日曜日はお寺の住職です。これからの時期、七月のお盆もあれば八月のお盆もありますし、お彼岸もあるし、お正月も元旦は一番忙しいんです。三百六十五日で本当に自分を休みにできる日は、一日か二日しかありません。そういう意味では自由がないんですが、勉強していた時は、やはり自由でないとその時間が確保できませんから、やはり自由だったと思います。私が夜中の三時くらいまで博士論文を書いている頃は、睡眠時間を削ってほとんど三時間ほどしか寝ていません。朝起きると庭掃除をしなければいけませんでしたから。自由ではなかったか、と言われるとやはり自由だったと思います。勉強する自由があったというのは、非常にありがたいと思っています。そのおかげで今があるんだと思います。学長は自由がない、勉強している時にはあった、この二つですね。

吉岡　最高学部長はどうなんですか？

渡辺　僕は自由なんです（笑）。ではもうお一方、いかがでしょうか？

質問者②　学生の立場から、一点、お三方にご意見をいただきたいことがあります。それは、日本の国家というものに対して、これから大学はどのような役割を果たしていくべきかということです。お話の端々にあったかとは思うのですが、今一度、お話を伺いたいと思います。吉岡先生のお話の中で、大学の役割とは、近代国家を形成する上での役割を果たしていたとありました。大学というのは、近代以降は国民国家の理念を体現するために機能してきた部分があると思っています。その一方で、世界的な社会というか、国家というものと、大学がどのような結びつきを持っているのかという部分で、お三方のご意見を伺いたいと思います。大学に籍を置く知識人の自由や大学の自由の話をする時に、どうしてもハイデガーとナチス国家の協力体制が想起されると思うんです。大学に所属する知識人が、国家にどのような役割を持っているかについて伺いたいと思っています。

渡辺　私は、自由というのは計画的、かつ主体的に行動することが

必要なのではないかと考えています。知識を蓄積する場合においても、その知識は何のための知識なのか、それは最終的に個が自律的になるためだ。そして、その自律的なことのために大学の時間があると強く思っています。ですから、今の質問に対して、我々が大学という場にいることによってどうしても為さなければならないことがあるのではないか、と思っています。それは、社会に対して、自分たちがはっきりと行動する言語を持っているべきではないかと思います。実は昨日、「大学の文学における自由とは何か」という朝日デジタル新聞のインタビューがありました。そこで答えたのは、今、我々が言葉というものを失っているということです。非常に簡単な言葉で次の行動が為されていく。レッテルをどんどんと貼っていくという状況の中で、もっと、社会がどんなふうに流れていても、大学という場では三日でも四日でも考えさせてもらう、そういうことをしっかりと言えるような言葉を持つことが大事なのではないかと思っています。その結果、時代から遅れても大学というところのある種のクソ真面目さは持っていなければならないと思っています。

吉岡　大学はいくつかの役割を持っているんです。大学ができた時から、法学者や医者など、こちらが知ることができない専門職なわけです。日本の大学は十九世紀に作られますが、これは国民主権国家が確立した時に、日本は遅れて作るための人材を出すというのが必要で、大学はそのための装置として機能したわけです。帝国大学はその典型です。東京帝国大学は、官僚、それから法学部に強く、産業を促進する役割を国家目的として作られるわけです。私学にもそういう側面はありますが、同時に国家とは切り離された形での産業社会ということになってくるわけです。現在は、近代国家の枠組み自体が、いわゆるグローバリゼーションの影響で崩れてきているので、国家との関係といった時に、「国家とはなにか？」、それから社会との関係となった時も同様で、「日本社会」自体が閉じられてはいないので、「大学が何をするか？」という問題の立て方自体がひじょうに複雑になっていると思っています。一方で、「大学は人材を育成するべきだ」と言った時の「人材」は、基本的には企業の考え方です。しかしそれに対して、大正大学の地域との結びつき方、立教大学にしても、元はミッションの大学ですから、ボランティアの経験も非常に豊富になっています。そういうところで、地域や社会との結びつきということでイメージできるのは、勤務地を作ることに限られない。

　立教大学であれば、陸前高田市とのコラボレーションによる、新しい町づくりなどの形で、地域と結びつくことができる。それから、一方で社会というものが国境を越えて、グローバルな世界にまで広がっているという意味では、人類社会全体を視野に入れなければならない。そういうことを考えられる人間を作ることが、大学の責務だと思っています。立教大学でも国際化を謳っていますが、その時の発想は、英語が話せる世界的な企業人として働ける人間を作るということよりも、世界的な視点で現在の自分というものをもう一度見ることができるような人間を作りたい。そのためには、ある程度簡単に、いったん海外に出てみるということが大事だと、そういう発想です。被災地

に出かける、身体を動かす、どこか違うところに行く、それにより現在自分が置かれている位置を客観的に相対化して見るという視点を持つということです。大学の教育はそういう側面を持っています。これをきちんとやると、「国家」と言った時にも、現在の国家というもののある種の限界や問題点などを自覚して、より良いものを作っていく視点というものを持つことができると思います。現在の与えられている情報の範囲の中でものを考えるのではなくて、その情報や知識を成り立たせている基盤そのものを相対化するという視点を持つことを、大学の使命だと考えています。そういう意味では、「国家」であれ「社会」であれ、そこと結びつけきることはできないのですが、今ある国家や社会、あるいは一人一人の個人というものの持っている基盤自体を問い直すことが必要だと思います。

それからもう一点、大学という知的な共同体としての自律性というものは絶対に守らなければいけないと思います。そこで、たとえばその中の教授がある特定の強い思想を持っているとすると、それをどうするか。たとえばハイデガーを大学が排除すべきだったかというと、それはそうではないのではないかと思います。そこの議論を大学できちんとオープンにできるということ、これは実際には難しいとは思いますが、その覚悟をしておくということ。大学の中に、左翼でも極右でもいいですが、そういう人間がいた時に、そのことで社会がその人間の排除を要求した時に、大学はある程度それを守らなければいけないと思います。守るということ、それからそこでの議論をオープンにすること、議論の根拠を明らかにすることをしないと、結局は排除しても排除しなくてもうまくいかない。そこが「知性」というものの在り方なのではないか、と思っています。

大塚　「国家」という言葉が出てくると、非常に躊躇してしまいますね。私の個人的な考えで申しますと、本学のような小さな大学では、文科省の方針に大きな影響があるんです。それはなぜかというと、一番は補助金です。それから設置の認可にしても、権限があちら側にあるんですね。いくら大学が一生懸命になって、新しい学部を設置したり、定員を増やしたいと言ってももうダメです。というわけで、私立大学からの弁明からもさまざまありますが、国家への立場は非常に弱いんです。国立の大学も国家への依存度が高いですから、なかなか独立しようというのは難しいことです。たとえば異質な教員がいたりして、国家に対して反対をしていても、言論の自由が我々には当然認められていますし、私個人としてもその時には「どうぞおやりください」と言えるような勇気を持ちたいと思います。

それから、もう一つ私立大学の特徴としては、学生からの学費（学納金）で運営されているんです。七割から八割がそのお金で運営されていることを考えれば、やはり学生第一に考えなければいけないと思います。学生とその保護者の方が、第一のステークホルダーになると思うんです。その人たちに対して何ができるのか、というのが大学の責任として先に考えるべきことです。文科省からうるさいことを言われたら、「それは私立大学としての権利である」というのが頑張りどころだと思いますね。それから、どうしても学生を入れた以上、卒業させていくということに関して責任があります。大学はそこで独自の教

育課程を持っています。今の社会に対して大学が一番果たさなければならない責任は、未来に対して大学がどういう人材を育てるか、それには臨機応変な力を付けさせるのが一番だと思うんです。たとえば自動車が自動運転になればバスの運転手やタクシーの運転手はいらなくなる。三十年後にはそういう時代がくると考えると、これからの若い人たちはどうやって生きていくのかと心配になる。その時にどうなっても対応できるような創造力を持った人たちを育てていくのが、これからの大学の役割なのではないかと思います。国からはそれを「やれ」という注文がきています。大学は自由である、国家権力に対しての反発、などのお話がありましたが、今のこの時期は、ある程度同じ方向を向いていかないと、日本という国がどうなってしまうのか、ということも含めて気になるところです。

渡辺　ありがとうございます。未だかつて、このテーマで大正大学と立教大学がお互いの話をするということはなかったと思うんです。キリスト教系の大学はキリスト教のことを学び、仏教系大学は仏教のことを学ぶ。ただそれだけで良いはずはない。これだけさまざまな紛争や異なった様相がある中で、第一歩として他の大学がどんな大学なのか、他の学校の学生がどんな生き方をしているんだとか、それを知らないことを前提として動いていることに対して危惧をしています。我々は、自由学園の最高学部という、志は大きいですが非常に小さな規模で動いています。我々と他の学校が互いに知り合うことの重要性が、思想においても大事なのではないかという思いで、この場を設けました。今、大学が置かれている状況が非常に難しいということも思いながら、そこに歯がゆさを感じもしましたが、そういうことを問い続け、お互いに知り合うということを求め続けなければ、前に進むことはできないのではないかと感じました。お互いがお互いを知ることによって、それぞれの主体性を確立していくことの重要性も考えました。最後に、この企画は立教大学と芸術劇場がともにやってきた池袋学の一環の企画でもあったことをお伝えしておきます。またこのような場を持って、お互いに研鑽していけたらと思っています。

（おおつか・のぶお　大正大学学長）
（よしおか・ともや　立教大学総長）
（わたなべ・けんじ　自由学園最高学部長）